

□ 書評 □

山本俊一

死生学

他者の死と自己の死

日野原重明

(聖路加看護大学学長)

この度、山本俊一博士著の『死生学—他者の死と自己の死』が医学書院から刊行された。

『死生学』の執筆は哲学者や神学者などの人文科学の畑の専門家または医学や看護に携わる医療従事者、その中でも一番多くが致死患者を扱う臨床医によって書かれたものであり、ホスピスの終末期医療の経験者によって書かれたものが最も多い。

ところが本書は健康な人を対象にした衛生学の基礎学者の立場から書かれた。人間の生と死を扱った専門書であるという意味では、本書の位置付けは極めてユニークである。しかし、山本博士は基礎医学の中の一つの基礎となった衛生学を東京大学でまず研究し、次いで東京都老人総合研究所副所長として、死の近い老人の医学の研究を医学以外に社会学的見地からも行い、さらに、私が学長をしている聖路加看護大学に大学院設置のための特任教授、さらには副学長として、人間のケアに医学と両輪をなす看護学の立場をも理解し、死の病理や病んでいる患者へのケアという場面で生と死を考え、山本博士独特の死生学を構築されているのである。

るのである。

この特色は本書第一部の「他者の死」と第二部の「自己の死」に分けて論述されているところによく明らかにされているが、この分類は極めて示唆するところが大きい。一部ではまず古代から現代に分けての東洋と西洋の死生観をレビューした上で、まず「他者の死」の理論モデルを立て、死生反応を人体の免疫反応に對比して解説されている。この理論モデルは人文学者らには考えつくことができない。また、臨床医でもそのような発想に考えを向けることが困難なほどユニークな学説であり、今後多くの専門家の論議のテーマとなることと思う。「他者の死」の中での死別、生別、喪失悲嘆を第一部で論じたあと、第二部の「自己の死」では、ライフ・サイクル、死の認知と、ここでも「自己の死」の理論モデルを展開し、最後に死への対策に触れておられる。

山本博士は、衛生学の切り口から医学界に登場し、東大退官後は老いと死の問題に関心を深め、『死生学』（技術出版）の三冊の編著を私と共に出版され、そして先生の生涯をかけてのこの執筆が大成されたのである。

先生の博学と科学者としての精緻な論理は、死生学を学ぶ医療従事者に対して有用な資料を提供するものと信じ、本書が広く読まれることを願うものである。
(A5 頁328 定価3,605円(税込)〒400 1996年 医学書院・刊)